

中高生と

ユースワーク

ユースワークとは、子どもが市民社会の一員として成長していく過程を手助けする営みです。ここでは、ユースワークがその目的のためにどんな風に取り組まれるのか、説明していきたいと思います。

京都市ユースサービス協会常務理事・事業部長 水野篤夫

日本において、小学生から中学生、高校生の大多数は学校に「所属して」います。正規のカリキュラムの時間だけでなく、部活動などの時間も含めた「時間」という意味でも、何か社会と関わる際の身分保障・身分証明という面でも。だから、学校外の若者への教育や福祉的な関わりが果たす領域は、欧米などと比べてもはるかに狭くなっているし、「軽く」見られているともいえます。しかし、これは「正常な」社会構成なのか？ 疑問があります。事実、戦後ずっと教育問題の多くが、学校から発する問題だったし、それは近年ますます強くなっています。不登校という

こと一つとっても、10万人の子ども・若者が学校に行かない・行けないことが常態化しているし、「いじめ」問題もそもそも「学校内問題」といつて過言では無いでしょう。そして、さまざまな処方箋がその時々に出されてもこれらの課題が減少していないことを見れば、原因は大本の社会構成の問題、つまり学校の肥大化にあるのではないかと、そう私たちは考えています。ユースワークは、こうした10代の若者を考えると、学校外での活動を通して、さまざまな経験の機会を提供することで、その成長につなげていくことを目指すものといえます。例えば、私たちの財団

の事業で、高校生が取材・編集してフリーペーパーを作る事業があるのですが、そこには、多様な高校生が集まり、いっしょに作業をします。ある時、参加していた高校生がこんなことを言い出しました。「私、学校で『変』って言われているの……」。一部のメンバーは笑い話に流してしまおうとしましたが、それをちゃんと受けとめて記事にしてみよう、というメンバーもいて、「高校生にとって普通って何だろう」、「変」って何だろう」ということが特集記事になっていきました。また、この活動ではとても積極的にリーダーシップを取っているメンバーに、



「学校でもそんなに元気なの？」と何気なく聞いたら、その高校生は「学校では目立たないようになっている（だからこの活動にきている）」と言いました。彼女らは学校とは別の顔を出せる場として、この活動を選んでいたので感じさせるやりとりでした。

私たちが運営に携わる青少年活動センターには、毎日多くの中学生がやってきます。スポーツ室で卓球をしたり、ロビーで漫画を読んだり、自習をしたりとそれぞれ

の放課後を楽しんでいます。しかし、中には「要らんこと」をやつてセンターのユースワーカーに叱られる中学生もいます。突っ張つて、暴言を吐いたり、叱られてもやめなかつたりと、手の掛かる彼女らですが、そんな若者に限って家族に問題を抱えていたり、学校でうまくやれていなかったり、という背景を見ることがあります。「実はうち、両親離婚したんや」等とワーカーに語ってきたりするのは、粘り強くこうした若者に

付き合ひ続けて初めて見せる顔がそこにあります。ここでも、ユースワークというのは、学校とは（家庭とも）異なる安心して居ることのできる場、つまり「居場所」を若者が作っていく手助けをしているといえます。ユースワークについて、ここでは中高生年代との関わりに絞って説明しました。手前味噌との批判を顧みずにいえば、だから「学校外」教育の領域を広げることと、学校外に子どもや若者が所属を持

つようにして、学校とは異なる論理・倫理で大人が関わるチャンネルを増やすことが、とても有効な（しかも唯一の……）手立てになるのではないかと。そして、そのための重要な方法論が、ユースワーク（ユースサービス）なのではないかと思うのです。では、学校を離れた後の若者、20代以降の若者との関わりはどのようなものか。それについては、また別の機会に述べることだと思います。

フィンランドからユースワーカー入洛

「欧州のユースワーカーと学び合う京都セミナー」が昨年12月12日から3日間、京都市山科、中京両青少年活動センターで開かれ、若者支援を巡って有意義に情報交換しました。フィンランドの首都ヘルシンキ青年局から、マリヤ・ホヴィさん、ピルユ・マッテイラさんの女性ユースワーカー2人が入洛し、初日は、山科青少年活動センターの施設見学や利用中の若者と話し合う場面もありました。13、14日は中京の同センターで平塚真樹法政大学教授ら研究者や京都のユースワーカーら約50人が参加してフィンランドと日本のユースワークについて意見交換しました。フィンランドでは、青年法が法律として制定され、国の大きな施策になっています。また、多くの事業が若者の声を生かして企画するのが特徴です。おたがいに両国の事業評価の違いを共有したり、フィンランドの遊びを取り入れたユースワークや事業紹介、センターに来ない若者へのアプローチを学校と連携して行っていることなども話し合い、専門性を高め合いました。

